

下水道展'19 横浜における NPO 21 世紀水倶楽部の活動報告

NPO 21 世紀水倶楽部 副理事長 阿部 恭二

1 はじめに

下水道展'19 横浜が8月6～9日の4日間、横浜市西区のパシフィコ横浜において開催された。当 NPO は、同展会場に設けられたパブリックゾーン「スイスイ下水道研究所」で、他の市民団体・学校とともにパネル展示を行ったほか、同研究所ステージで開かれた「みらい研究発表大会」において研究発表を行った。また、8月8日に同会場会議センターで開催された、国土交通省水管理・国土保全局下水道部流域管理官付市民科学プロジェクト主催による下水道展'19 横浜併催企画「市民科学シンポジウム～地域の未来のための協働～」パネルディスカッションにおいてファシリテーターとして参画した。本稿は、同展におけるこれらの当 NPO の活動報告と個人的な感想をまとめたものである。

2 スイスイ下水道研究所

今年の下水道展におけるスイスイ下水道研究所は、横浜島（横浜市）、東京島（東京都）、相模原島（相模原市）、小平島（小平市）、川崎島（川崎市）、埼玉島（埼玉県）、神奈川島（神奈川県）、大阪島（大阪市）、NPO・学校小島、顕

微鏡小島、ワークショップ小島、ビストロ下水道小島、川柳小島、スイスイステージ島と、全体を 14 の島に見立てて展示等を行ったが、当 NPO はスイスイ下水道研究所入口付近に設けられた「NPO・学校小島」においてパネル展示を行った。

スイスイ下水道研究所に出展した自治体（東京都など）がマンホールカードを配布したこともあって、下水道展オープン前から会場入口前に行列ができたが、行列の多くが子どもたちではなく、お年寄りだったのには驚かされた。お年寄りたちはマンホールカードを手に入れ、お孫さんたちに渡して、喜ぶ姿に目を細めるのだろうか。

山形県鶴岡市のお年寄りの3～4人のグルー



行列を作る来場者たち

プがマンホールの缶バッジを探していたのにも驚いた。相模原市のブースで塗り絵に挑戦すると、缶バッジをもらえることを教えた。それを聞いた帽子をかぶったおばあさんがニコッと微笑んでいたが、鶴岡市からわざわざ缶バッジのために来たのだろうか。

スイスイ下水道研究所には小さな子どもを連れて親子連れや、先生に引率された、黄色い帽子をかぶった小学校低学年の生徒たちの来場が多かった。ベビーカーを押す親子連れも散見された。過去の下水道展ではほとんど見かけない光景だった。

小さな子どもたちが多かったから、女の子がパネルの前に座り込んでしまったり、7～8歳の男の子たちが追いかけてっこをしたり、会場でもらったカードをチラシ置きプラスチックケースに挟み込んだり、突然泣き出したり、母親が子どもを抱きかかえてあやしたりと、子どもたちの元気な姿が会場のあちこちで見かけることができた。

3 NPO・学校小島

前述のとおり当 NPO は、他の市民団体・学校とともに「NPO・学校小島」にパネル展示を

行った。パネル展示を行ったのは、NPO 法人雨水市民の会、全国川ごみネットワーク、NPO 法人 日本水フォーラム、ふるさと侍従川に親しむ会、みずとみどり研究会、NPO 法人 都川の環境を考える会、埼玉県立桶川西高等学校科学部、そして当 NPO のあわせて8団体。なお、ふるさと侍従川に親しむ会は、横浜市環境創造局下水道事業マネジメント課および同道路局河川企画課の協力を得て参加していただいたものである。

NPO・学校小島を訪れた母子連れは「子どもの夏休みの自由研究のネタ探しで来た」と来場の目的を説明されたが、若い母親という感じの女性が8団体のパネルを1枚1枚スマホで撮影していたのもそれが目的だったか。

民間企業の入館証をつけた、東北大学卒業後つくばの国立環境研究所に1年在籍したという韓国の研究者は、「韓国の4つの大きな川で、市民と一緒に生き物調査をしたいと考えている。生き物の同定はどうしているか」を尋ねてきた。微かな記憶をたどってその方法を紹介したが、うまく伝わったかどうか。

NPO 関係のパンフレット・チラシを配って声をかけた中には、松本市の下水道部署の職員もいた。この方は「下水道の PR 方法について参



「NPO・学校小島」のパネル展示



当 NPO の展示パネル

考になるものがあれば」と語っていた。上高地の処理場は、今はフル稼働だとも。

当 NPO が展示したパネルは、亀田泰武顧問の企画による「様々な世界のトイレ」。亀田顧問がさまざまな国のトイレについて現地調査をしたうえでその特徴をまとめたもので、予め教えていただいた説明内容は以下のとおりである。

「21 世紀水倶楽部では、ホームページで生活に関連するいろいろな水回りについて紹介をしています。トイレの歴史もその一つですが、今回、当 NPO による下水道展での展示パネ

ルでは、現地での調査等も踏まえた、「様々な世界のトイレ」を紹介しています。

トイレは中東からアジアにかけてしゃがみ式ですが、また欧州では腰掛け式がこれまで一般的でした。しゃがみ式も、暖かい地方では手桶でお尻を水で洗うようにして使います。

西洋化により腰掛け式が世界標準になりつつあります。一方、欧州で不特定多数の人が利用するトイレで、衛生的なのでしゃがみ式のところもあります。

腰掛け式が世界的に普及してきていて、中東や南アジアでは腰掛け式にお尻を洗うホースシャワーを備えたトイレが増えています。この扱いは非常に難しく、トイレを水浸しにしてしまいます。

トルコのホテルでは、シャワーホースでなく便器後ろから水を水平に出す洗浄装置がついているトイレが普及しています。水量が調節でき、使いやすいです。

昔紙を使っていなかった地域、配管の関係などで、トイレトペーパーを流してはいけないところもけっこうあります」

説明要員として参加していただいた当 NPO 会員の皆さんはこの説明内容をよく理解されて対応されていたようである。



展示パネルの説明をする当 NPO 会員

熱心にパネルを読み込む民間企業の来場者や、パネルを見ながら話し込む女の子たち（中学生くらいか）、トイレトペーパーを使わない習慣に驚きの声を上げる人たちなどがいた。

来場者のうちの1人、横浜市民の方から次のような指摘を受けたことはとても印象的だった。過去の下水道展ではなかったことだ。

「会場を回っても、SDGs の話をする人がいない。SDGs のバッジをつけている人もいない。小学生でも今はSDGs を習っている。子どもたちに夢と希望を与えるものにしてほしい」

4 みらい研究発表大会

みらい研究発表大会は、「ウンコドリル」で人気となった「うんこ先生の漢字教室」の前後に会期中毎日行われ、NPO・学校小島に出演した団体からも雨水市民の会（高橋朝子、柴早苗：山と災害に役立つZeroトイレの提唱）、全国川ごみネットワーク（伊藤浩子：身近なことから川ごみ・海ごみを減らそう）、埼玉県立桶川西高等学校科学部（野口悠馬代理奥村崇生：高校水族館ハートフル桶川西水族館の管理・運営）、そして当NPOが参加した。なお、桶川西高等学校科学部の発表は、当初、部員の野口悠馬さん



うんこ先生の漢字教室



雨水市民の会の発表



全国川ごみネットワークの発表



桶川西高等学校科学部の発表



当 NPO 清水顧問による発表「世界の列車トイレ」



が発表することになっていたが、野口さんが熱中症になり、急きょ、科学部顧問の奥村崇生先生が行った。

当 NPO は 8 月 9 日 13 時から、清水治顧問が今年 5 月に 2 泊 3 日で行った米国カリフォルニアでの最新の調査を交えた「世界の列車トイレ」を発表した。

審査員長の江戸家小猫さん、下水道広報プラットフォーム企画運営副委員長の栗原秀人さん、水の天使ミス日本の西尾菜々美さんが厳正なる審査を行い、みらい研究発表大会での発表者全員がそれぞれの発表にふさわしい賞を受賞した。

5 市民科学シンポジウム

下水道展'19 併催企画である国土交通省水管理・国土保全局下水道部流域管理官付市民科学プロジェクト主催の「市民科学シンポジウム～地域の未来のための協働～」は 8 月 8 日 13 時 30 分より、パシフィコ横浜会議センター 501 ルームで開催された。

同シンポジウムは、下水道の見える化やよりよい地域づくりを推進する下水道の市民科学の先行事例となる自治体や活動団体の取り組みを紹介し、ノウハウや経験を共有するとともに、

市民科学による地域の課題解決について議論することで、よりよい地域づくりのための市民科学の魅力を伝え、理解を深めることを目的に行われたもの。

国土交通省水管理・国土保全局下水道部では、市民にとっても下水道事業にとっても Win-Win となるこの下水道の市民科学の取り組みを推進するために、2017 年 3 月に「下水道の『市民科学』ガイドブック」を作成したほか、2019 年 1 月には「下水道の『市民科学』研究テーマ集」を発行している。

シンポジウムの前半は講演と事例発表で、プログラムは次ページの表のとおりである。後半は、講演、事例発表を行った 6 名に加え、みずとみどり研究会事務局長の佐山公一さん、雨水市民の会副理事長の松本正毅さんをパネラーに迎えて私、阿部がファシリテーターとして「市民科学による地域の課題解決について」をテーマとするパネルディスカッションを行った。

このパネルディスカッションでは最初に、「下水道の『市民科学』研究テーマ集」に掲載されているテーマの中で、関心がある研究テーマ、関心を持つ理由、取り組むことで何がしたい、何ができるかといったアイデアを 7 名のパネラーから発表してもらい、それに基づいて議論

が進められた。

パネラーから発表されたアイデアを大雑把に分類すると、①川で見られる生き物と水質の関係、②災害と下水道の関係、③環境教育、の3つに分類できるが、そのそれぞれについてパ

ネラーに質問や感想を述べてもらい、下水道の市民科学の今後の進め方や注意点などを議論した。

シンポジウム終了後には、さらに行政意見交換会も行われ、議論が深められた。

「市民科学シンポジウム」プログラム

タイトル	講演・発表者
講演「下水道の市民科学プロジェクトについて」	国土交通省水管理・国土保全局下水道部流域管理官 白崎 亮
講演「市民科学とは」	市民科学プロジェクト座長、東京都市大学特別教授 小堀 洋美
事例発表1「横浜市の取り組み ～行政内部への広がり」と市民科学の可能性～」	横浜市環境創造局下水道計画調整部 下水道事業マネジメント課長 富永 裕之
事例発表2「百閒川の水質改善に向けた取り組み」	岡山理科大学附属高等学校科学部顧問 宮内 伸弥
「下水道の「市民科学」岡山市の成果と 今後」	岡山市下水道河川局下水道経営部 下水道河川計画課副主査 久保田 大威
事例発表3「水の学校 「より深い市と市民の連携へ」」	武蔵野市環境部下水道課水循環推進係長 高橋 正之
「地震震災時と復旧過程のトイレの使い 方を考える」	水の学校サポーター 市川 ゆかり



パネルディスカッションのよう

パネルディスカッションは、個人的な感想を
いえば、盛り上がらなかった、の一語に尽きる。
パネラー同士のやり取りも極めて少なく、会場
からの発言も全くなかった。シンポジウム終了
後、素直に関係者にそのことを吐露したところ、
「会場からの発言がなかったから」、あるいは
「パネルディスカッションの時間が短かったか
ら」という感想を聞いたが、下水道の市民科学
に対する根本的な問題、背景があるように感じ
られた。

下水道の市民科学を推進するうえで、言葉自
体に馴染みが少なく、その言葉に行政も市民も
やや戸惑っているような印象を受けるが、その
普及推進が緒についたばかりであるので、言葉
の問題は置く。下水道の市民科学の定義や範囲
がやや理解しづらいという面もあるが、この問
題についても、その取り組みが軌道に乗ってい
くことで解消されていく問題だ。

下水道の市民科学の根本的問題について私見
を述べれば、行政職員の減少から、とりわけ中
小自治体の業務が多忙を極めるようになってき
ており、そうした状況の中で、自分たちの業務
範囲を今以上広げるような下水道の市民科学を

行うことに抵抗があるのではないか。その抵抗
感、逼迫感が、馴染みの少ない「下水道の市民
科学」につきまとっているのではないか。

そのため、下水道の市民科学を引き受ける特
に行政サイドに、発想の転換が求められるので
ないかと考えられる。下水道の市民科学を実践
することで、市民と一緒にこれからの下水道事
業を展開していくのだという発想の転換が――。
今回のシンポジウムを通して、そのことを強く
感じた。

※ ※ ※

以上、下水道展'19 横浜における当 NPO の活
動および個人的な感想を紹介してきたが、スイ
スイ下水道研究所でのパネル展示においても、
みらい研究発表大会での発表においても、また
市民科学シンポジウムにおいても、当 NPO の
会員の皆さんにはもちろん多くの方々にお力添
えをいただいた。厚くお礼申し上げたい。

今回の経験を次の活動にいかにか活かしてい
くかについては、少し時間をかけてじっくり考
えていきたいと思う。